

イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けたという事実は、原始教会の時からキリスト者たちを悩ませ、時が経つと共に信仰共同体には重荷になってきていたと思われまます。マタイによる福音書では本来はヨハネがイエスから洗礼を受ける立場であることをヨハネが認めているという二人の会話を記しています。一方、マルコによる福音書ではヨハネは自分とは比較できないほど優れた方としてのイエスの到来を予告し、その方の履物のひもを解く値打ちもないと自己を卑下し、ルカによる福音書ではヨハネがイエスの受洗の前に逮捕され、イエスが誰から洗礼を受けたのかわからなくしています。ヨハネによる福音書ではイエスの受洗は記されていません。これらのことは、イエスがヨハネから洗礼を受けたことが教会にとって都合の悪いことにも拘わらず、隠すことができないよく知られた事実であったことを示しています。共観福音書には、「天が開いた」、「神の霊が鳩のようにご自分の上に降って来る」、「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が聞こえた、の三つのことが記されています。イエスの上に聖霊が降ったことによって、イエスは神の子として、主の僕としての使命、任務へと立てられたことを語っているのです。

イエスは、自分の罪を悔いてヨハネのもとにやって来て、回心のしるしである洗礼を受けましたのでしょうか。イエスの時代の神殿は民の贖いの役割を担っていたにも拘わらず、金持ちや貴族だけに目を向け、社会的な立場の弱い人々や貧しい人々の救済は放置していました。また律法学者やファリサイ派の人たちは律法を守りたくても守れない人々を「罪人」と断罪して切り捨てていました。その結果、人々は飼い主のいない羊のような状況に置かれていました。彼らもまた神の愛する子たちだ、彼らのために何かをしなければ、その決心がイエスの受洗の動機にあるように思えるのです。また、イエスの受洗は家族を棄て、故郷を棄てる決定的な行為だったのではないのでしょうか。

その後、イエスはヨハネを離れ、独自の活動を始めました。イエスの罪人あるいは社会から疎外された人たちと共に食事をし、彼らに回心を要求することもなく、彼らのそばに寄り添って共に生きた様を考えると、イエスの洗礼に罪人あるいは罪人とならざるを得なかった人たちとの深い連帯をみる事ができるのです。

洗礼を受けるとは古い自分に死んで、そこから起こされて、新しい命に生きることを意味しています。洗礼は、単なる回心の徴ではなく、私たちの存在が根底から返られ、神さまのものとされるということです。イエスの洗礼に連なることによって、神さまがイエスと共にいるように、私たちも神さまと共にあるものとされるのです。